

人文科学（言語学）副専攻卒業制作
「言葉の作る共同体、共同体の作る言葉」

法学部法律学科 4 年

学籍番号:31006222

庄司羽花

指導担当者：小屋逸樹 先生

提出日：2014 年 1 月 21 日（火）

<目次>

序章 Reflection

第一章 学術的系譜

第二章 概念の不存在と表現の難しさ

第三章 言葉に秘められている概念

第四章 まとめ

参考文献

添付資料1 調査アンケート

添付資料2 調査分析結果

序章 Reflection

“Reflection”という語に魅せられたのは、もう15年以上も前のことである。鏡や水面に映る自分の姿は虚像でしかない。経験や内面を映し出すものとして、あるいは本来の姿とは別個の表向きの姿として、その虚像を解釈の与えられる存在にしているのはこの“reflection”という言葉そのものなのではないかと考えると、その美しさと奥深さが実感される。しかし、日本語にはこの意味での“reflection”に相当する語は存在しない。『ジーニアス英和辞典第3版』には“reflection”の意味として「1a 反射、反響、反射光 1b 影響、反映、現れ 2 映像、(鏡などに)映った影」とある。何かに「映」し出された「像」という意味では「映像」という語は間違いとはいえないが、一般的に「映像」という語を耳にして鏡や水面に映る姿を思い浮かべる者は少ないであろう。また「虚像」という語は光の反射という物理的な現象に着目した語であり、その汎用性において“reflection”とは異なる。その点「子どもは大人の鏡だ」という日本語の表現は大変興味深い。子どもを大人の態度や行動を映し出すものとして捉えた表現であり、「鏡」という語を用いて“reflection”の「影響、反映、現れ」という意味を表している。しかし、この場合子どもは飽くまで「鏡」という物体であり、そこに映し出される大人の姿は対象化されていないのである。従って、はじめに記した“reflection”の意味は「鏡などに映し出された姿・像」という極めて説明的な言葉でしか表現することができない。『ロングマン現代アメリカ英語辞典』を参照すると、“reflection”の第一の意味として“an image reflected in a mirror or similar surface”（鏡やそれに相当する物の表面に映し出された像）とあり、この意味での使用が広く一般的であることが窺える。日本人も鏡を覗き込むことはあり、当然のことながらそこに映るものも目にしているにも拘わらず、その像に名前を与えることはなかった。そして、日本語の会話の中ではその語が存在しないことにより不便を感じることはほとんどない。一方、英語の会話の中では“reflection”は日常的に用いられ、歌詞においても多用される。「襖」や「梅雨」など、その生活空間や環境にしか存在しないものであるならば兎も角として、確実に両方の言語空間に存在しているものに、一方では言葉を付与し、他方では付与しないのはなぜであろうか。またその語の有無により、言語話者の世界の捉え方には違いは生じるのであろうか。

言語相対論を考えるにあたっては、“brother”という語が「兄」と「弟」の区別をしないことなど、英語を学んだ日本人であれば誰もが気づく明白な違いを扱うこともできる。この例であれば、年功序列の縦社会である日本においてその **brother** が年上であるか年下であるかの違いが重要となることから、日本語では「兄」「弟」という言葉による区別が生じることはごく自然なことであると考えられる。しかしここでは、その成分についても同じであるとえられる“friends”と「友達」といった表現や、そもそも一方の言語にしか存在し

ない概念を基盤とする動詞や形容詞など、日常ではあまり気づかない言語間の差異に踏み込むことにより、使用言語が異なることによって生じる細かな感覚の違いに焦点を当てたいと考える。そこでこの論文では、まず言語と世界の見え方との関係について、サピアやウォーフをはじめとする先人たちの研究への考察を行う。次に日本語と英語それぞれを用いる環境での生活経験を有する帰国子女に対し行なった言語感覚の調査を分析し、言葉から受ける印象や一方の言語によってのみ表現できる事柄について考えたい。日常的に用いられている言葉の果たしている機能、包含している意味、そしてその影響力をマクロ・ミクロ双方の視点から解明していく。

第一章 学術的系譜

池上嘉彦氏によれば、文化をある社会の人々によって行われる民俗学的分類の総体であるとする、その分類とは「ある社会の人たちがその社会の成員として暗黙の諒解を与えている分類—民族的タクソノミー(folk taxonomy)」であると考えられ、その社会に属す限り、人はこの分類を成長の過程で習得する。こうして文化特有の「認識(cognition)」が体得される。分類をするということは物や動作、状態、感情といったものに属性を与え区別をすること、すなわちそれらを客体化・対象化することである。ある社会においてどのようなものが対象化され、どのような分類がなされているかを読み解くにあたり、その対象を表現する語が存在するか否かということが一つの大きな鍵となる。Whorf(1940)は、生理学的な欠陥によって青色しか見えない民族がいた場合を例に挙げ、「青という語は彼らにとって何の意味も伝えない」と述べている。つまり仮にこのような民族がいたとすると、全ての物が青色である為、「青」を他の色から区別し対象化する意味はなく、彼らの視界の中に「青」は存在しないのである。Lois Lowry のニューベリー賞受賞小説”The Giver”においてもまさにこの色の識別が問題となっていた。色を識別することをやめた社会において主人公の少年が初めてりんごの「赤」を識別する力を身に付けた際、視界に何かしらの変化が起きたことは認識できてもそれが「色」というものであることを理解できない。しかしひとたびそこに「赤」という語が付与されると「赤」も他の全ての色も見えるようになる。言葉の存在が区別を可能にし、区別の必要性があるからこそ言葉が生まれる。色に対する名称の付与はこの双方向的な作用を示す大変分かりやすい例と言えるであろう。

Sapir(1929)もまた、「言語は『社会的現実』に対する指針である」と主張としている。人間が自らの社会の表現の手段（つまり、特定の言語）に多く支配されていることから、人間の認識する「現実の世界」というものは、「その言語集団の習慣の上に無意識的に形づくられている」ものであり、「言語表現自体が分類を暗示する力」を有し「共同体の言語習慣がある種の解釈を前もって選択させる」というのが Sapir(1929)の見解である。Whorf(1940)はこの主張を踏襲し発展させるような形で、言語体系とは考えを形成するものであり、個人の知的活動、印象の分析、知識の総合の為の指針であると捉え、人は「母国語の規定した線にそって自然を分割する」と考えた。すなわち、絶対的・中立的な立場から描写することの不可能な自然に対し、我々は言語というフィルターを通してある種の強いられた解釈をしているのである。例えば、エスキモーの言語には「雪」一般を指す語は存在せず、種類の異なる雪それぞれを表す語のみが存在するが、雪を区別するような語を持たない言語を話す者は、降り積もる雪を見てそれがどのような雪であるかなど考えもしないであろう。狭義の自然に対する語彙数の増減は環境によるところが大きいということは理解するに難くない。しかし、Whorf(1940)の言う「自然」とは Sapir(1929)の示す「現実の世界」

に相当すると考えると、そこには環境の中に物理的に存在するものの他に、抽象概念や現象など客体化・対象化がなされることではじめて存在し得るものもある。この客体化・対象化のプロセスと言語の関係をひも解くこともまた、言語と社会の結びつきを考える上では必要不可欠である。

「精神的中間世界の存在」を主張しこのプロセスの解明に挑んだのが Weisgerber(1953)である。この精神的中間世界を Weisgerber(1953)は『外界の存在が「人間にとって意識される存在」として新しい形で存在するに至る為に通過する中間地帯』と定義づけている。嗅覚を考えた場合、動物は何かから匂いがした際にそれが栄養のあるものだと認識した瞬間それを反射的に食すが、人間はその匂いに対し「解釈された印象」を抱き、それを熟慮した上で行動に出る為、そこには思考的な瞬間が存在するのであるという。この「解釈された印象」の「解釈」の根拠がどこに存在するかというと、その場所が「精神的中間世界」なのである。視覚的な情報に対する解釈を考えればなお分かりやすい。目の前にある植物Aを見て「雑草だ」と判断したとする。しかし「雑草」などという植物は外界には存在しない。「雑草」というのは人間にとっての意味に基づき精神的中間世界にのみ存在するのであり、植物Aはそのカテゴリーに該当しただけなのである。区別・分類によって精神的中間世界に様々な概念を存在させ、その一つ一つに名前を付けるという作業は個人によってなされるものではない。人は集団の構成員であり、集団には共同社会と「言語という共通財産」がある。つまり精神的中間世界はそこに存在するものに恣意的に名前が付与されることによって言語的中間世界に変容する。特定の言語集団はこの言語的中間世界を共有・存続している為に、言語と言語社会とは結びつく。これが Weisgerber(1953)の考えである。この精神的中間世界を「概念」あるいは「思考像」と捉えたと、オグデンとリチャーズの「意味の三角形」が思い浮かぶ。意味の三角形の頂点の1つである「概念」が個人により創造されるものではなくいかに社会との結びつきの強いものであるかを示すには、この Weisgerber(1953)の「精神的中間世界(言語的中間世界)」を用いる考え方が有効であろう。

以上のような先人たちの研究成果を踏まえ、序章で取り上げた”reflection”という語について考えてみる。既に述べたように、日本語話者の目にも鏡や水面に映る姿は見えている。知覚可能でなければ、「鏡などに映し出された姿・像」という説明的な表現さえもすることはできないであろう。日本語に”reflection”に相当する語が存在しないということは、日本語話者の「精神的中間世界」に”reflection”が存在しない、すなわち日本語話者は”reflection”という概念を有しないということになる。知覚可能であったとしても、日本語による解釈によって形づくられる日本語話者にとっての「現実の世界」には、”reflection”は構成要素として含まれていないのである。Sapir(1912)は、ある言語の語彙全体は「その共同体の関心を占めるような考え、興味、職業すべてについての複雑な目録」のようなものであると述べている。関心が先行して言語表現が発生するのか、言語表現の存在が関心を生み出すのかということ、鶏と卵の命題同様判断することが極めて困難であると言わざるを得ないが、少なくとも”reflection”という語の存在している言語集団においては”reflection”が関

心の対象となっており意味のあるものとして捉えられているということは言えそうである。ではその”reflection”への関心の実態とは一体何であろうか。ここからは筆者の経験や周囲から寄せられる情報を頼りに想像するほかないのであるが、”reflection”という語は自己との対峙を表現しており、自らがどのような人間であるかということへの関心の強さの表れではないかと筆者は考える。「欧米人はよく鏡の中の自分に対し声をかけ士気を高めたり励ましたりしている」と聞く。かの有名な童話『白雪姫』でも王妃は「鏡よ、鏡…」と鏡に問いかけ、そこに映し出されるものに一喜一憂する。”Reflection”が単なる虚像ではなく、もう一人の自分として確実にそこに存在していると考えるのが自然であろう。そのもう一人の自分の姿から見てとれる内面を観察したり、それが本来のあるいは理想の姿とかけ離れていれば悩んだり、そういったことが日常的に行われている為に”reflection”という言葉は意味あるものとして生きてくるのである。一方、”reflection”という概念を持たない日本語には「鏡面」「水面^{みなも}」という語が存在する。反対にこれらは英語には存在しない語である。同じ鏡や水面を見ている、一方の言語はそこに映っているものに焦点をあて、他方はそれを映し出している場所（もの）に焦点をあてているというのは非常に興味深い現象であり、これがまさに Whorf(1940)の言うところの「母国語の規定した線に沿った自然の分割」なのである。

第二章 概念の不存在と表現の難しさ

学習により言語を身に付ける場合、既に習得している言語による表現をいかにその新しい言語で表すかという対訳的な学習方法が取られるが、ある一定の年齢に達する前の子どもは未知の言語の使用される環境に置かれると耳からその言語を吸収し、対訳的あるいは文法的な学習なしに言語を習得できるとされる。そこで、英語圏での生活経験を有し、日本語と対応させなくとも英語を認識することのできる帰国子女 10 名に言葉の感覚に関する調査に協力してもらった。注目すべきは彼らの「精神的中間世界」には日本語・英語両方の概念が存在し、言語体系を基盤に構築される「現実の世界」も日本語を使用している時と英語を使用している時とは異なるという点である。第二章・第三章では、その彼らの感覚から読み取ることのできることについて論じたいと考える。

まずは”reflection”のような日本語での表現の難しい言葉について聞いてみた。こちらの提示した 12 個の単熟語のうち、彼らによる日本語での表現方法が特に多様であったのは以下の 4 つである。

- 1) get rid of
- 2) upset
- 3) miss you
- 4) be grounded

いずれも日常会話において頻繁に用いられる語であり、4)については子ども社会においてよく耳にする表現である。1)get rid of に対しては「取り除く、排除する、捨てる」という一般的な訳語の他に、「なくす」「切り捨てる」「二度と関わらない」「はねのける」「終わらせる」といった表現や『邪魔なものを』取り除く」という前提条件を付した表現が挙げられた。このうち、英和辞典に get rid of の訳語として書かれていない表現の一つである「なくす」という言葉は、「あの辺りのごちゃごちゃした物をなくさないよこの新しい棚は入らないよ」といった形でごく自然に用いられ、そのなくす対象は『邪魔なもの』『不要なもの』であることが前提となっており、かつその場から取り除くことを意味しているに過ぎずその手段が「捨てる」ことであるとは限らないという点においても、get rid of という語のニュアンスに合致したものであると考えられる。”Get rid of”も「なくす」も、ともに極めてシンプルな表現ではあるものの、そこには定義を越えた多くの意味が内包されていることが見て取れる。次の 2)upset については、まず『ジーニアス英和辞典第 3 版』に記載されている意味に着目したい。人を主語あるいは動作の対象とする場合の意味として、ここには「a 心を乱す、狼狽させる b 取り乱している、うろたえる」とある。しかし帰国子女たちが”upset”に対してあてた日本語は「怒る／怒った」が圧倒的に多く、他には「頭にくる、気分を害した、機嫌が悪い」や「ご機嫌ななめ」「プチ怒り」といったユニークな表現も見られた。つ

まり、実際に”upset”という語が用いられるのは、人が「怒っている」あるいは人の「機嫌が悪い」ときであるが、それは「憤怒」などの日本語で表わされるような深刻な状況ではなく、日常的に頻繁に発生する状況であると言えそうである。少なくとも、「心を乱す、うろたえる」などの幾分文学的で書き言葉の印象の強い言葉に相当する語ではない。この帰国子女たちが、どのような場面で”upset”という語が使用されるかを、そのシーンに実際に居合わせ、同じような経験を積み重ねることによって習得し、”upset”という概念を身につけたことを示すよい例であると言える。続く 3)miss you という言葉は非常に厄介である。これもまた極めて頻繁に用いられる語であるが、機能や意味においてこれに相当する日本語は存在しない。帰国子女たちの回答を見ると、”miss you”を日本語にする場合、二つの異なる用例が想定される。一つは”I will miss you.”という別れ際の用例である。こちらを想起して日本語で表現をした回答には、「寂しくなります」「名残惜しい」「別れが惜しい」といった言葉が並んだ。もう一方の用例は”I miss you.”であり、こちらを念頭に置いたと見られる回答には「会いたい」「寂しい」「会いたくて落ち着かない」といった表現が挙げられた。中にはあえて説明的に「いなくて寂しい+会いたい」と表現するものもあり、恐らく上述の回答を総合すると「そこにAさんがいない」「容易に会うことができない」ことを前提条件として湧き上がる「寂しさ」や「Aさんに会いたい」という感情を表現しているのが”miss you”という語であると言える。興味深いのは”I will miss you.”の”will”は未来を表す助動詞であり、この表現はあくまで”I miss you.”という状態がこれから発生することを伝えているに過ぎないが、それを日本語に訳そうとすると「名残惜しい」「別れが惜しい」という言葉が挙げられることである。「寂しくなります」という表現は「寂しさ」が今後湧いてくることを意味するが、「名残惜しい」「別れが惜しい」というのは今現在の感情であり、用いられるシーンは”I will miss you.”と全く同じであるが、本質的な意味は異なる。”miss you”の概念を端的に日本語で表すことも難しいが、「惜しい」という概念もまた英語への変換の難しいものであることが窺える。最後に 4)be grounded という言葉を取り上げたい。こちらは居住経験のある国がアメリカであるかイギリスであるかによってその意味に明確な違いの生じた大変特異な語である。既に述べたように、”be grounded”というのは子ども社会において頻繁に用いられる語であるが、それは幼少期をアメリカで過ごした筆者の認識にすぎず、イギリスでは必ずしもそうではないようである。アメリカに暮らしていた帰国子女たちはこの言葉を「叱られる」「怒られて外出禁止になる」「謹慎させられる」「外出・遊びを禁止される親から受ける罰」と表現した。幼い頃、近所の友人宅のベルを鳴らすとその子の母親が登場し”Sorry. Kate is grounded today.”と言われることが度々あったと言う。つまり、何か悪いことをしたり親の言いつけを守らなかったりした場合に、罰としてしばらくの間（一般的には登下校以外の）外出を禁じられることを”be grounded”と言うのである。これが日本ではあまり見受けられない風習であることは明らかであるが、ここで着目したいのがイギリスからの帰国子女たちが”be grounded”にあてた日本語の表現である。そこには「基づく」「根拠とする」「すりつぶす」などの表現が並び、上記のような「親か

ら子に対する罰」という要素は一つも含まれていなかった。すなわち、イギリスにはこのような用法、ひいてはこのような風習は存在しないのである。同じ英語という言語を用いており、確かにその語自体はアメリカにもイギリスにも存在するにも拘わらず、共同体によってその用法が、つまりは言語習慣が異なることが明確に見てとれる。思うに、親が子どもを叱るという行為はどのような共同体（言語集団）でもなされているに違いなく、外出を禁ずるという方法も決してアメリカでしか取ることのできないものではないであろう。それでも日本やイギリスではこのような方法が取られず、アメリカでは非常に一般的な方法として親子間で用いられているのは、やはりこの行為に対し母親の視点からは”ground”、子どもの視点からは”be grounded”という言葉が付与されていることに起因するのではないであろうか。まさに Sapir(1929)の言うように社会が「言語集団の習慣の上に無意識的に形づくられている」ことの証がここに存在するように思われる。

上記4つの単熟語の他に、訳すことの難しい語として回答者が挙げたのは、”interesting”, “cool”, “context”, “unique”, “love”などの英語表現および「もったいない」「縁」「他人」「お疲れ様」「いただきます」などの日本語表現であった。これらの英語表現の特徴としては、その用途の多様性が挙げられるかもしれない。例えば”interesting”という語であれば、”That sounds interesting.”という具合に用いた場合は本当に興味を持っているケースが多いが、”Interesting.”と一言で用いた場合は、実際はさほど心を惹かれていないことも少なくない。回答の中には”interesting”は「おもしろい」ではない！」と強く主張するものもあったが、気を遣って「へー、おもしろいね。」と言うような場合は上述の”Interesting.”の一言に限りなく近いニュアンスであると言えそうである。使用するシーンによって話者がその語に込める意図が異なると、そのあらゆる意図を汲み取った形で端的に示すことのできる訳語を探すことはやはり容易ではない。多くの意味を含む概念としての”interesting”は、物理的に存在する物を指す語よりもはるかに訳しにくい。”cool”という語も「かっこいい」あるいは「涼しい」という訳語が一般的ではあるが、実際はそれらの意味の他に「いいね」「最高」「珍しい」「OK!」などの意味でも用いられており、さらに「かっこいい」という日本語には日本語話者（日本人）の考えるかっこよさの概念しか含まれておらず、それが必ずしも英語話者の思うかっこよさとは一致しないことも簡単に訳すことができない要因であろう。”love”については名詞であれば「愛情」と訳されることが多い為に、動詞としてもそこに「愛情」が含まれなければならない”like”とは区別されるものであると日本語話者は考えるかもしれないが、実際の英語の日常会話の中では”love”と”like”の間にはあまり大きな差はなく、むしろ学習によって英語を習得した日本人が”like”を用いるシーンの多くで英語話者は”love”を使用しているような印象を受ける。日本人によるその語の定義付けと実際の用法・使用頻度のずれが、かえって語の説明を難しくするケースの一つである。”context”や”unique”も、それぞれ「コンテキスト」「ユニーク」と概念をそのまま取り入れるようなカタカナ語が存在しているが故に、そのカタカナ語の概念と英語の概念との間にわずかでも違いが存在するとそれをどのように表現すべきか頭を抱えることになるのである。続い

で日本語表現に関して、まず「もったいない」という語は、かつてノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイさんが **Reduce, Reuse, Recycle** の 3R の意味を全て包含する極めて特異かつ魅力的な言葉としてあえてこの日本語を取り上げたことから明らかなように、英語の一単語で表現することは難しい。「縁」というのも極めて日本的な概念であるし、「他人^{ひと}」という語も「他人^{ひと}と比べても仕方がない」といった表現で「自分以外の全ての者」を指すこともあれば、「他人^{ひと}事」などのように「自らとは関係のない者」という意味で用いられることもある為複雑な概念と言えそうである。また「お疲れ様」「いただきます」などは日本では日常の一部となっている挨拶言葉であるが、仕事終わりや食事の前など同じシーンでも例えばアメリカではこのような挨拶はしない。疲れをねぎらう／食事を作ってくれた人や食事として頂く命に感謝するなどの機能は存在するものの、このような挨拶言葉は指示対象が存在しない為訳すことはほぼ不可能である。いずれの言葉も英語・日本語それぞれの会話や文章の中においては回答者たちが迷いなく極日常的に使用しているものであるものの相互変換が容易でないのは、概念の存在と語の存在との間に強い結びつきがあることの表れであると言えるであろう。

第三章 言葉に秘められている概念

続いては言葉から想起されるイメージについて考えてみたい。Nicole Takahara 氏の調査（注1）を参考に、相互に訳語として使用されている英語と日本語の単語（例：friends と友達）について、同じ語群の中からそれぞれの単語から連想するもの、あるいは単語の意味に内包されていると思われるものを選択してもらった（cf. 添付資料1）。以下の四角内の

次の言葉から連想するもの、次の言葉の意味に包含されるものを選び、数字に○をつけてください。（複数選択可）

(1a) friends

1. 優しさ 2. 気遣い 3. 協調 4. 正直 5. 同性 6. けんか
7. やめられる 8. 刺激・影響 9. 思いやり 10. 尊敬

(1b) 友達

1. 優しさ 2. 気遣い 3. 協調 4. 正直 5. 同性 6. けんか
7. やめられる 8. 刺激・影響 9. 思いやり 10. 尊敬

語群に含む語は恣意的に筆者が選んだものであり、当然のことながら対象となっている単語の意味やイメージ全てを表しているものではない。しかし訳語として用いられている一対の単語にどれだけ印象の違いが存在するかを調べる為には十分であると考えられる。また、英語に対しても日本語に対しても選択肢として日本語の表現を用意したのは、英語の単語に対する選択肢のみ英語にしては、やはりその選択肢自体のイメージにも日本語との差異が生じてしまう為である。ここで注意したいのは、この調査がいわゆる「成分分析」とは異なるということである。ここに掲げられている単語は、英語・日本語ともにその定義がほぼ同じであって、訳語として広く用いられているものである。確かに成分分析を行った場合、brother と兄弟の違いなど、やはり文化に根差した違いは現れる。しかし、Nida(1964)も指摘しているように、成分分析の本質的な限界として「補足的、内包的な意味要素が無視される」ということがある。成分分析で現れるような明白な違いとは別の、心的イメージに基づく相違点をこの調査では探りたい。対象としたのは以下の12対の単語である。

- 1) friends／友達
- 2) boyfriend ・ girlfriend／彼氏・彼女
- 3) best friend／親友
- 4) play／遊ぶ

- 5) teacher／先生
- 6) cook／料理／bake
- 7) planet／惑星
- 8) family／家族
- 9) mom／お母さん dad／お父さん
- 10) company／会社
- 11) princess／お姫さま
- 12) dance／ダンス

それぞれの単語のイメージの選択肢として提示した語群については添付資料1のアンケートを参照されたい。そしてその結果を解析したのが添付資料2である。調査に協力してもらった帰国子女10人はアメリカ・イギリス文化圏に暮らしていた者がそれぞれ5人ずつであった為、解析結果もアメリカの帰国子女とイギリス文化圏の帰国子女とで色分けをした。この解析結果からは、訳語として広く用いられている語であってもそのイメージには違いが存在することが明らかになった。その一つ一つを確認していく。

1) friends／友達

まず、**friends** に対し「2.気遣い」をイギリス文化圏に住んでいた3人が選択しているのに対し、アメリカに住んでいた者は一人も選択していない。一方「8.刺激・影響」を選択したのはアメリカの4人だけである。これは **friends** と友達の差ではないが、イギリスでの **friends** の要素とアメリカの **friends** との要素とに違いが存在することを物語っているのかもしれない。**Friends** と友達の差が現れたのはまず「3.同性」という要素である。**Friends** を「同性」と捉える人は一人もいなかったが、友達については3人が選択している。その差は3人と特別大きなものではないが、**friends** に対し誰ひとりとして「同性である」というイメージを抱かなかったこのゼロという数字にはやはり着目すべきである。日本では「異性との友達関係は果たして成立するのか」という議論がテレビ番組等で行われるなど、友達と言えばまず同性であるという見解が珍しくない。この友達の性別に関しては、Takahara 氏の行った調査においても本調査と同じような結果が出ている(注2)。次に「10.尊敬」に関しても、友達については過半数が「10.尊敬」を選択しているが、**friends** の要素として選択したのは2人に止まる。ただしこれは「尊敬」という語自体が極めて日本的な重たい概念であることに起因しているように思われる。選択肢として「尊敬」の代わりに”respect”を挙げていれば、また結果は変動した可能性がある。

2) boyfriend ・ girlfriend／彼氏・彼女

この解析結果において特に目に留まるのは、**boyfriend ・ girlfriend** の方が彼氏・彼女よりも「3.対等」な関係であると考えられているにも拘わらず、前述の **friends** についてはその要素としてあまり選ばれなかった「10.尊敬」を **boyfriend ・ girlfriend** に対して半数の人が適用していることである。すなわち、彼氏・彼女に関しては未だに彼氏が彼女に対しご飯等を奢る文化が根強く残っていることから分かるように必ずしも対等な関係ではなく、

しかしその一方でそれは共通認識として存在しているものであって個別的な尊敬を意味するものではない。それとは反対に **boyfriend・girlfriend** は対等な関係でありながら互いを尊敬しあっているケースが多いようであることが、この回答結果から導き出される。

3) best friend／親友

Best friend に対し「4.正直」という要素を選択したのはアメリカでの居住経験を持つ3人のみであり、イギリス文化圏に住んでいた人は一人も選んでいない。また「8.刺激・影響」についても、**friends** に対する見解同様アメリカの5人は全員選択しているのに対しイギリスの選択者数は1人のみである。この二つの要素から、アメリカの **best friends** は率直な意見を言い合うことで互いに刺激・影響しあうものなのではないかということが窺える。一つ大変興味深いのは、**friends** に比べて **best friend** は「10.尊敬」の選択者数が急増していることである。尊敬の度合いというのはこの調査方法では測ることはできないが、友達も親友も尊敬の対象であることは見てとれる。つまり、友達と親友との間の差と、**friends** と **best friend** との間の差では、後者の方が大きいと言えるのではないであろうか。

4) play／遊ぶ

まず特筆すべきは、遊ぶという語は頻繁に「7.学生」に対して用いられ、現に我々学生は時間とお金があれば「遊んでいる」わけであるが、**play** という語は学生による遊びの概念と相いれないということである。それはこの調査でも明らかとなっている。学生や若者が遊ぶ場合は、“hang out”という語を用いるのが一般的である。では **play** という動詞はどのような主体を念頭に置いたものなのであろうか。「4.ゲーム」「6.いたずら」「8.走る」の三つの要素については **play** に関して選択している人が「遊ぶ」よりも多いのに対し、**play** という語から「9.待ち合わせ」を想起する人は一人もおらず、また「3.お金」に関して **play** の要素として選択した人の数は「遊ぶ」に比して非常に少ない。「1.子ども」という要素は **play** についても「遊ぶ」についても多くの人を選択しているが、上記の結果を総合すると、「遊ぶ」に比べて **play** の方が子どもの行為としての認識が強いことが窺える。

5) teacher／先生

はじめに「9.大学」という要素が **teacher** に関して選ばれないのは、成分分析に近い解析になってしまうが、大学の先生が **teacher** と呼ばれない為である。英語では高校生までは学年 (**grade**) を用いるものの、大学においては〇年生という言い方は用いず **freshman, sophomore, junior, senior** という名称で区分される。このことから、大学がそれまでの学校教育とは別のものとして認識されていることが分かる。大変興味を引かれるのは、「5.優しい」「6.厳しい」という要素についてである。**Teacher** に関しては、「5.優しい」「6.厳しい」を選択した人はともに5人であったのに対し、先生に関しては「5.優しい」はわずか1人で「6.厳しい」は4人。優しさと厳しさを併せ持つ **teacher** に対して、「2.権威」「3.尊敬」を選ぶ人が **teacher** に比べ先生に対しての方が多かったところも含め、先生は「目上の厳しい人である」という認識を持つ人が多いことが現れていると言えよう。

6) cook／料理／bake

ここでは **cook** と **bake** のイメージの違いも同時に検証する為に、**cook**、料理、**bake** の三つの語を並列にした。まずその **cook** と **bake** についてであるが、**cook** に対しては「1.女性」のイメージはあまりないのに対し、**bake** に対しては回答者の半数が「1.女性」を選択した。実際にアメリカの大ヒットドラマの中で「I bake.」と告白した男子高校生が周囲から「やめておけ」と忠告されるシーンを見たことがある。**Bake**（お菓子作り）はやはり女性のすることという印象が英語を用いる言語集団の中にも存在することが窺える。一方、料理という日本語に対してもまた「1.女性」を選択した人が **cook** よりも多くいる。料理が上手であることを「女子力が高い」などと表すことから、日本においては料理を含む家事一般については女性のイメージが強いと言えるであろう。「3.温かい」「7.日常」については、**cook** と対をなす語として挙げた「料理」を **cook** の本来の訳である「料理する」という語にしなかったことの影響も出ていていると考えられる。「料理」という語では **cook** した結果完成した **dish**（料理）までも含んでしまう為、「作る」という工程の意識されにくいお店での食事なども想起され、温かさに関しては調理工程そのものに比べれば選択者数が減少し、日常という要素については **dish** の意味での料理という語から「食事」そのものを思い浮かべた場合間違いなく数値が上昇する。比較対象の選択ミスであると認めざるを得ない。「8.煮込む」「9.焼く」「10.炒める」に関しては3つとも5人以上が選択したのは料理に関してだけであり、**cook** に比べ調理法が多様であることが考えられる。

7) planet／惑星

この項目についてのみ、**planet** と惑星それぞれについて連想される言葉を一つのみ選択してもらった。すなわち、一番その語のイメージとして強いものが選択される。非常に顕著に現れたのは、アメリカからの帰国子女の **planet** に対する認識が特異であるということである。なぜならば、そのほとんどが **planet** の一番の要素として「1.地球」を選んだからである。イギリス文化圏に暮らしていた人たちの **planet** に対する見解は「3.星」「4.宇宙」などに散らばっており、必ずしも統一的ではない。また惑星という日本語に関しても、主に「2.銀河系」と「3.星」に分かれた。「1.地球」を選んだ人は一人もいない。アメリカでは地球のことを指して「this planet」という表現を用いることが頻繁にある。日本で放送されている某缶コーヒーのCMの中で、地球に降り立った外国人俳優の扮する宇宙人が、地球人のことを指して「この惑星の住民は一」と語るが、「この星の住民は一」と言うよりも響きが新鮮に感じられるのは、アメリカ的な **planet** の用法をそのまま日本語に置き換えているからであろう。

8) family／家族

Family と家族に関して大きく差が出たのは、「5.親しい仲間」を含むか否かという点である。**Family** と聞いて半数の人が「5.親しい仲間」も思い浮かべると回答したのに対し、家族に関しては誰ひとりとして「5.親しい仲間」は含めなかった。これは一定の人数が「10.継承」という要素を家族に対して選択していることから分かるように、日本語のあるいは日本の家族というのは飽くまで親族や血縁関係にある人を指し、心的距離などの要素が入る余

地は大きくない。一方 **family** には当然のことながら親族も含まれるが、その基盤となっているのは血縁関係だけではなく、親しみや関わってきた時間なども **family** と呼ぶ理由となり得ると考えられる。

9) **mom**／お母さん **dad**／お父さん

両親がどのような存在であるかというのは文化によって大きく異なることは想像に難くない。ではそこには具体的にどのような違いが存在するのであろうか。まず **mom** とお母さんの違いは、お母さんが「2.孝行」の対象である一方、**mom** に対しては「9.仲良し」という認識が多くの人に持たれているという点である。「2.孝行」というのも極めて日本的な概念である為、英語の単語にあてはめること自体が困難であるとも考えられるが、「2.孝行」は相手を敬う気持ちが前提となっていることを考慮すると、そもそも親子の間に「9.仲良し」という言葉で言い表せるような関係性が存在している場合、そこに「2.孝行」という行為は馴染まない。**Dad** とお父さんについても、「2.孝行」と「9.仲良し」という要素に関しては **mom** とお母さんと同様の結果が見られ、また **dad** にはなくお父さんにのみ存在するイメージとして「6.いつかは越えられる／越えていく存在」という項目が挙げられている点からは、お父さんがはじめは自ら（子）よりも先あるいは上にいる存在であることが逆説的に導き出され、英語圏での親子の関係性と日本のそれとの間の違いが分かりやすい形で表れている。

10) **company**／会社

Company や会社は人が組織して作っているものである為、それを構成している人間の属する共同体（言語集団）が異なれば、その実態にも違いが生じることが予測される。**Company** も会社も「1.組織」であるという点に関しては見解が一致しているが、**company** という語から想起されるイメージとしては「2.人」「4.仲間」を選択する者が半数を超えたのに対し、会社という語については「3.トップダウン」「8.上司」を選択する者が多かった。人と人が仲間となって組織している **company** と、上下関係が強固に構築された形で組織されている会社は、いずれも組織であることには違いないが、その体系は大きく異なることが、二つの語を比較するだけでも浮き彫りになる。

11) **princess**／お姫さま

Princess という語の思考像に「2.ドレス」が含まれることは想定していたが、お姫さまという概念には「2.ドレス」を含めない人が多いことは意外であった。「2.ドレス」よりも「3.着物」を想起する人がいることも影響しているであろうが、それ以上に **princess** についてはほとんどない「7.世間知らず」というイメージをお姫さまに対しては半数の人が抱えていることがこの「2.ドレス」に関する結果の背景にあるのではないかと考えられる。つまり、お姫さまという語を耳にする際、それが本物のお姫さまを指すわけではなく、「7.世間知らず」であることの比喩表現として用いられているケースが多い為、お姫さまは「2.ドレス」に直結しないのではないであろうか。語の用法が思考像を規定する例の一つであると言えそうである。

12) dance／ダンス

この二つの語に関する回答結果を一見して分かることは、Dance は「5.パーティー」という要素に、ダンスは「3.習い事」の要素に集約されるのではないかということである。「2.D J」「4.自由」「7.楽しい」「8.お酒」といった項目はまさに「5.パーティー」の構成要素であり、これらを選択する人が圧倒的に多かったのが dance である。一方ダンスについては、「3.習い事」という要素をほぼ全員が選択しており、上記の「5.パーティー」の要素はほとんど選ばれていない。イベントの最後にダンスパーティーが開かれることが珍しくない環境と、そのようなパーティーに馴染みがなく極限られた人たちが趣味などとするものとしてダンスを認識している集団との間には、外来語として同じ発音で同じ語を用いていたとしてもその解釈に大きなずれが生じることが非常に明確に表れている。

以上、12対の単語について考察をしてきたが、もちろん各語の細かな定義付けをする為にはより多くのデータを収集する必要がある。ただし、訳語として認識されているものであってもその語に内包される意味やその語の思考像には違いが存在するという事実と、具体的にどのような差異が生じるかということの例を示すという意味では、10人に対する調査でも一定の傾向が表れ、資料として検証する意義があったものと考えてよいであろう。

(注1) Intercultural Encounters with Japan edited by J.C. Condon and M.Saito The Simul Press 1974

(注2) 森住衛「単語の文化的意味」(三省堂) P.169

第四章 まとめ

学術的系譜をたどった上で、概念と言葉と共同体をのぞき見るように帰国子女10人の見解を分析した。ここから分かることは、サピアが主張した通り、確かにある言語集団にとっての「現実の世界」というものはその「言語習慣」の上に無意識的に構築されているものであるが、第二章で取り上げた **be grounded** という表現のようにその「現実の世界」で起きていることを言葉に落とし込み、もともとあった意味に加え新たな意味を付与するという反対方向の働きも存在し、そこでまた言語による「現実の世界」の再規定・再構築が起きるとのことである。このようにして「言語習慣」も「現実の世界」も絶え間なく変化していき、それ故に第三章で見たような形で言葉には極めて細かく複雑な要素の組み込まれた概念が存在するのである。この概念あるいは思考像と称されるものには個人の経験も作用するに違いない。従って、概念は同じ言語集団の中においてもある程度の多様性を有するものであるが、特定の言語集団の中で生活していく為には言葉と概念を共有することは必要不可欠であり、言葉を使用する中で概念の総体は自ずとできてくる。この概念の総体を正確に習得できるのは、恐らくその言語集団の構成員としてその概念の構築の当事者となっているからなのであろう。

<参考文献>

- ・池上嘉彦；文化人類学と言語学（弘文堂 平成7年3月30日）
- ・森住衛；単語の文化的意味 friends は「友だち」か（三省堂 2004年9月1日）

- ・ Henle, P. (1958) Language, Thought and Culture . The University of Michigan Press
- ・ Lowry, Lois. (2002) The Giver. Laurel Leaf; Reprint
- ・ Nida, E. (1964) Componential Analysis . in Toward a Science of Translating, Leiden :
E.J. Brill
- ・ Sapir, E. (1912) Language and Environment . American Anthropologist
- ・ Sapir, E. (1929) The Status of Linguistics as a Science . Language,5
- ・ Weisgerber, L. (1953) Das Weltbild der Muttersprache in Vom Weltbild der deutschen
Sprache
- ・ Whorf, B.L. (1940) Science and Linguistics Technology Review, 42
- ・ Whorf, B.L. (1941) The Relation of Habitual Thought and Behavior to Language .
Sapir Memorial Publication Fund

- ・ ジーニアス英和辞典 第3版（大修館書店）
- ・ LONGMAN Advanced American Dictionary（Pearson Education）

<添付資料1>

言語学副専攻論文 言語感覚に関するデータ収集

回答者情報：住んでいた国（ ）

Part A

次の言葉から連想するもの、次の言葉の意味に包含されるものを選び、数字に○をつけてください。(複数選択可)

(1a) friends

1. 優しさ 2. 気遣い 3. 協調 4. 正直 5. 同性 6. けんか
7. やめられる 8. 刺激・影響 9. 思いやり 10. 尊敬

(1b) 友達

1. 優しさ 2. 気遣い 3. 協調 4. 正直 5. 同性 6. けんか
7. やめられる 8. 刺激・影響 9. 思いやり 10. 尊敬

(2a) boyfriend / girlfriend

1. 友達公認 2. 親公認 3. 対等 4. 気遣い 5. プレゼント
6. 思いやり 7. 自慢 8. 正直 9. 努力 10. 尊敬

(2b) 彼氏／彼女

1. 友達公認 2. 親公認 3. 対等 4. 気遣い 5. プレゼント
6. 思いやり 7. 自慢 8. 正直 9. 努力 10. 尊敬

(3a) best friend

1. 優しさ 2. 気遣い 3. 協調 4. 正直 5. 同性 6. けんか
7. 一人だけ 8. 刺激・影響 9. 思いやり 10. 尊敬

(3b) 親友

1. 優しさ 2. 気遣い 3. 協調 4. 正直 5. 同性 6. けんか
7. 一人だけ 8. 刺激・影響 9. 思いやり 10. 尊敬

(4a) play

1. 子ども 2. 自由 3. お金 4. ゲーム 5. 友達 6. いたずら
7. 学生 8. 走る 9. 待ち合わせ 10. 楽しい

(4b) 遊ぶ

1. 子ども 2. 自由 3. お金 4. ゲーム 5. 友達 6. いたずら
7. 学生 8. 走る 9. 待ち合わせ 10. 楽しい

(5a) teacher

1. 学校 2. 権威 3. 尊敬 4. 親しみ 5. 優しい 6. 厳しい
7. 対等 8. 専門家 9. 大学 10. スポーツ

(5b) 先生

1. 学校 2. 権威 3. 尊敬 4. 親しみ 5. 優しい 6. 厳しい
7. 対等 8. 専門家 9. 大学 10. スポーツ

(6a) cook

1. 女性 2. 男性 3. 温かい 4. 難しい 5. 母親 6. 父親
7. 日常 8. 煮込む 9. 焼く 10. 炒める 11. 揚げる

(6b) 料理

1. 女性 2. 男性 3. 温かい 4. 難しい 5. 母親 6. 父親
7. 日常 8. 煮込む 9. 焼く 10. 炒める 11. 揚げる

(6c) bake

1. 女性 2. 男性 3. 温かい 4. 難しい 5. 母親 6. 父親
7. 日常 8. 煮込む 9. 焼く 10. 炒める 11. 揚げる

(7a) planet

1. 地球 2. 銀河系 3. 星 4. 宇宙 5. 公転 ※1つのみ選択

(7b) 惑星

1. 地球 2. 銀河系 3. 星 4. 宇宙 5. 公転 ※1つのみ選択

(8a) family

1. 父母兄弟 2. 祖父母 3. いとこ 4. 叔父・叔母 5. 親しい仲間
6. 愛情 7. 尊敬 8. 団結力 9. 対等 10. 継承 11. 拘束

(8b) 家族

1. 父母兄弟 2. 祖父母 3. いとこ 4. 叔父・叔母 5. 親しい仲間
6. 愛情 7. 尊敬 8. 団結力 9. 対等 10. 継承 11. 拘束

(9a) mom

1. 尊敬 2. 反抗 3. 孝行 4. (親と子は) 対等 5. 個人
6. いつかは越えられる／越えていく存在 7. 忠実 8. 期待 9. 仲良し

(9b) お母さん

1. 尊敬 2. 反抗 3. 孝行 4. (親と子は) 対等 5. 個人

6. いつかは越えられる／越えていく存在 7. 忠実 8. 期待 9. 仲良し

(9c) dad

1. 尊敬 2. 反抗 3. 孝行 4. (親と子は) 対等 5. 個人
6. いつかは越えられる／越えていく存在 7. 忠実 8. 期待 9. 仲良し

(9d)お父さん

1. 尊敬 2. 反抗 3. 孝行 4. (親と子は) 対等 5. 個人
6. いつかは越えられる／越えていく存在 7. 忠実 8. 期待 9. 仲良し

(10a) company

1. 組織 2. 人 3. トップダウン 4. 仲間 5. 楽しそう
6. 就職 7. 能力 8. 上司 9. リーダー 10. 多様性

(10b)会社

1. 組織 2. 人 3. トップダウン 4. 仲間 5. 楽しそう
6. 就職 7. 能力 8. 上司 9. リーダー 10. 多様性

(11a) princess

1. おとぎ話 2. ドレス 3. 着物 4. 自由 5. 動物
6. 世話係 7. 世間知らず 8. お金持ち 9. 美しい 10. かわいい

(11b)お姫さま

1. おとぎ話 2. ドレス 3. 着物 4. 自由 5. 動物
6. 世話係 7. 世間知らず 8. お金持ち 9. 美しい 10. かわいい

(12a) dance

1. 学校 2. DJ 3. 習い事 4. 自由 5. パーティー 6. ステージ
7. 楽しい 8. お酒 9. ドレス 10. ロマンズ 11. 派手

(12b)ダンス

1. 学校 2. DJ 3. 習い事 4. 自由 5. パーティー 6. ステージ
7. 楽しい 8. お酒 9. ドレス 10. ロマンズ 11. 派手

Part B

以下の語の意味を日本語で表現してください。

(1) punctual

(2) reflection

(3) get rid of

(4) hum

(5) upset

(6) daydream

(7) behave yourself

(8) miss you

(9) groove

(10) cheat

(11)magical

(12)be grounded

Part C

Part A・Part Bに登場した語の他に、英語→日本語または日本語→英語に訳せないあるいは訳すとニュアンスが変わってしまうと感じる語があれば自由に書いてください。

< 添付資料 2 >











